令和７年度 全国学力・学習状況調査の結果について

学びの改革支援課

○　中学校理科は文部科学省ＣＢＴシステム（ＭＥＸＣＢＴ）によるオンライン方式（ＣＢＴ：Computer Based Testing）で実施しました。（来年度は中学校英語もＣＢＴでの実施を予定しています。）また、ＩＲＴ（Item Response Theory:項目反応理論）を用いた結果返却を行いました。
○　小・中学校において、「学校に行くのは楽しい」の肯定的回答が、昨年度より増加しています。また、個別最適な学びと協働的な学びの両方に肯定的に回答している児童生徒は、「学校に行くのは楽しい」と回答している割合が高く、教科の得点も高い傾向にあります。
○　小学校において、国語の平均正答率が全国と同程度となり、算数・理科の平均正答率が全国をやや下回りました。中学校では、国語・理科の平均正答率が全国と同程度となり、数学の平均正答率が全国を下回りました。
○　調査結果は、子どものよさや可能性を伸ばす材料として活用できるように、各学校へ伝えていきます。

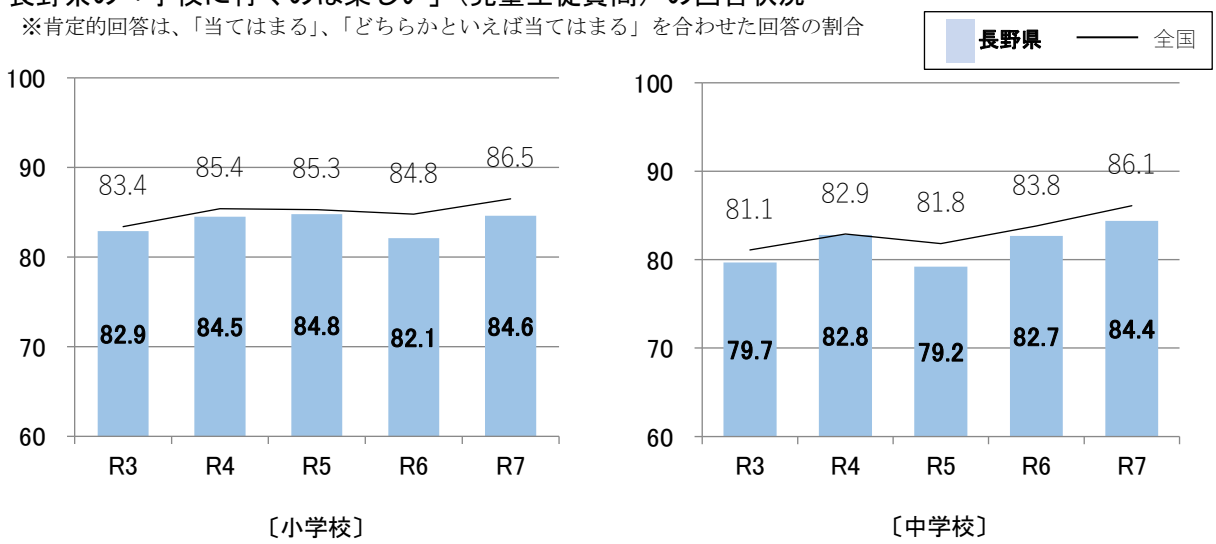
１　長野県の実施状況

学　校	当日実施学校数（集計対象学校数）	当日実施児童数（小６）・生徒数（中３）
公立小学校	345 校（内特別支援学校２校）	15,041 人
公立中学校	185 校（内特別支援学校３校）	14,333 人
公立小・中学校計	530 校（内特別支援学校５校）	29,374 人

※当日実施児童・生徒数は、回収された解答用紙が最も多かった教科の解答用紙の枚数で算出。

２　長野県の「学校に行くのは楽しい」（児童生徒質問）の回答状況

※肯定的回答は、「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」を合わせた回答の割合

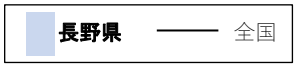


「学校に行くのは楽しい」の質問に対して、肯定的に回答をした児童生徒の割合は、全国を下回っているが、小学校・中学校共に、肯定的な回答をした割合が令和３年度から緩やかに増加してきている。
また、「学校に行くのは楽しい」（児童生徒質問）と相関関係が見られる質問についても、児童生徒の肯定的回答の割合が、増加してきている。

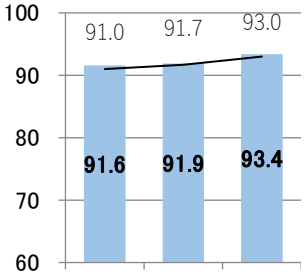
3　「学校に行くのは楽しい」と小学校・中学校共に相関係数が高い質問項目の肯定的回答の状況

※ [　　] の中の数字は、相関係数。「相関係数」は「学校に行くのは楽しい」の質問と、その他の質問の間に相関関係があるかを数値で表したもの。文部科学省では、全国学力・学習状況調査において 0.2 以上で相関関係があるとみなし、数値が高いほど相関関係が強い。

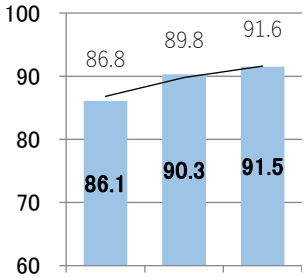
※肯定的回答は、「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」を合わせた回答の割合



①　普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいありますか

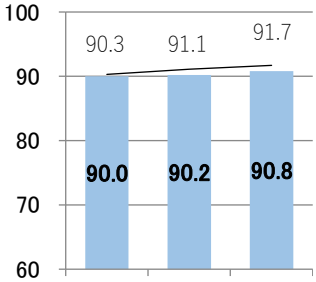


〔小学校〕 0. 408

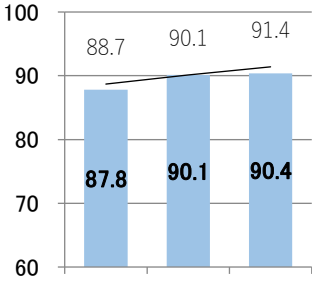


〔中学校〕 0. 467

②　友達関係に満足している

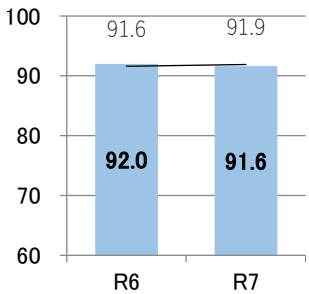


〔小学校〕 0. 387

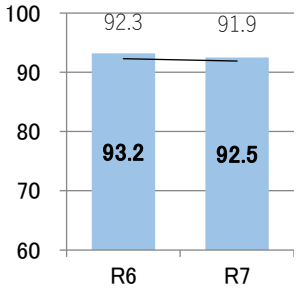


〔中学校〕 0. 456

③　授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切にして、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいた

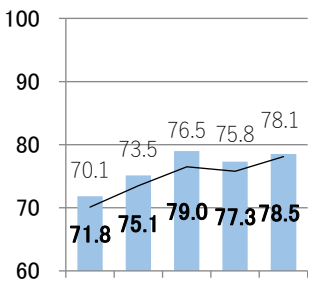


〔小学校〕 0. 349

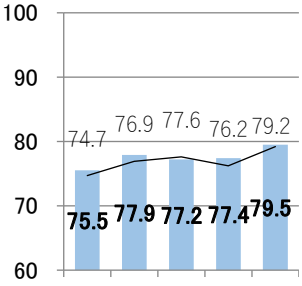


〔中学校〕 0. 355

④　自分と違う意見について考えるのは楽しいですか

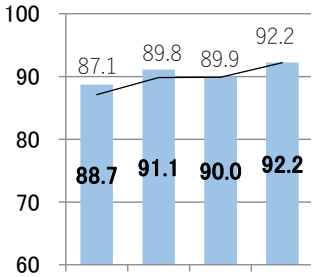


〔小学校〕 0. 348

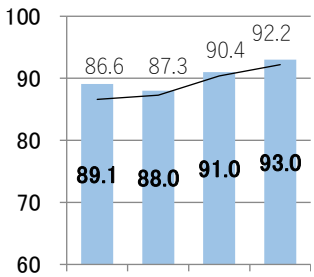


〔中学校〕 0. 315

⑤　先生は、あなたのよいところを認めてくれている

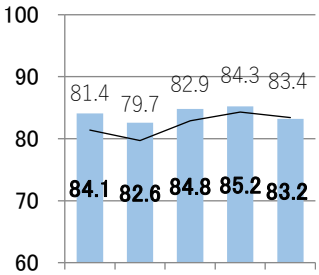


〔小学校〕 0. 341

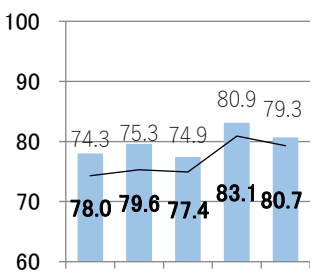


〔中学校〕 0. 346

⑥　授業は、自分に合った教え方、教材、学習時間などになっていた

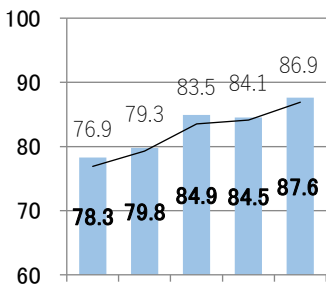


〔小学校〕 0. 328

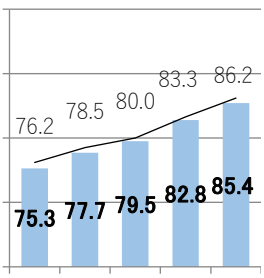


〔中学校〕 0. 318

⑦　自分には、よいところがある

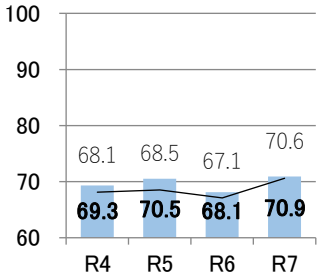


〔小学校〕 0. 323

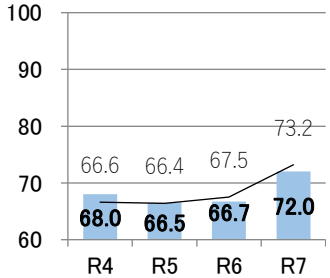


〔中学校〕 0. 386

⑧　困りごとや不安があるとき、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか



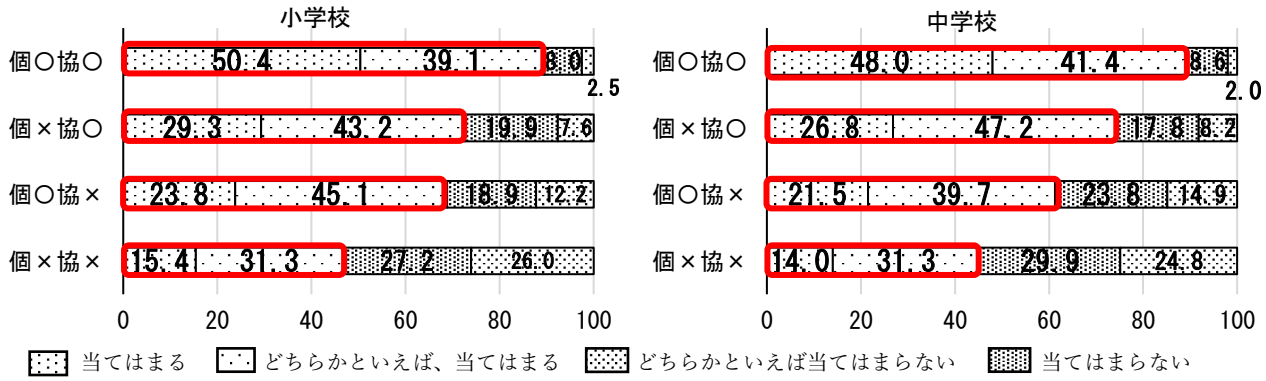
〔小学校〕 0. 310



〔中学校〕 0. 346

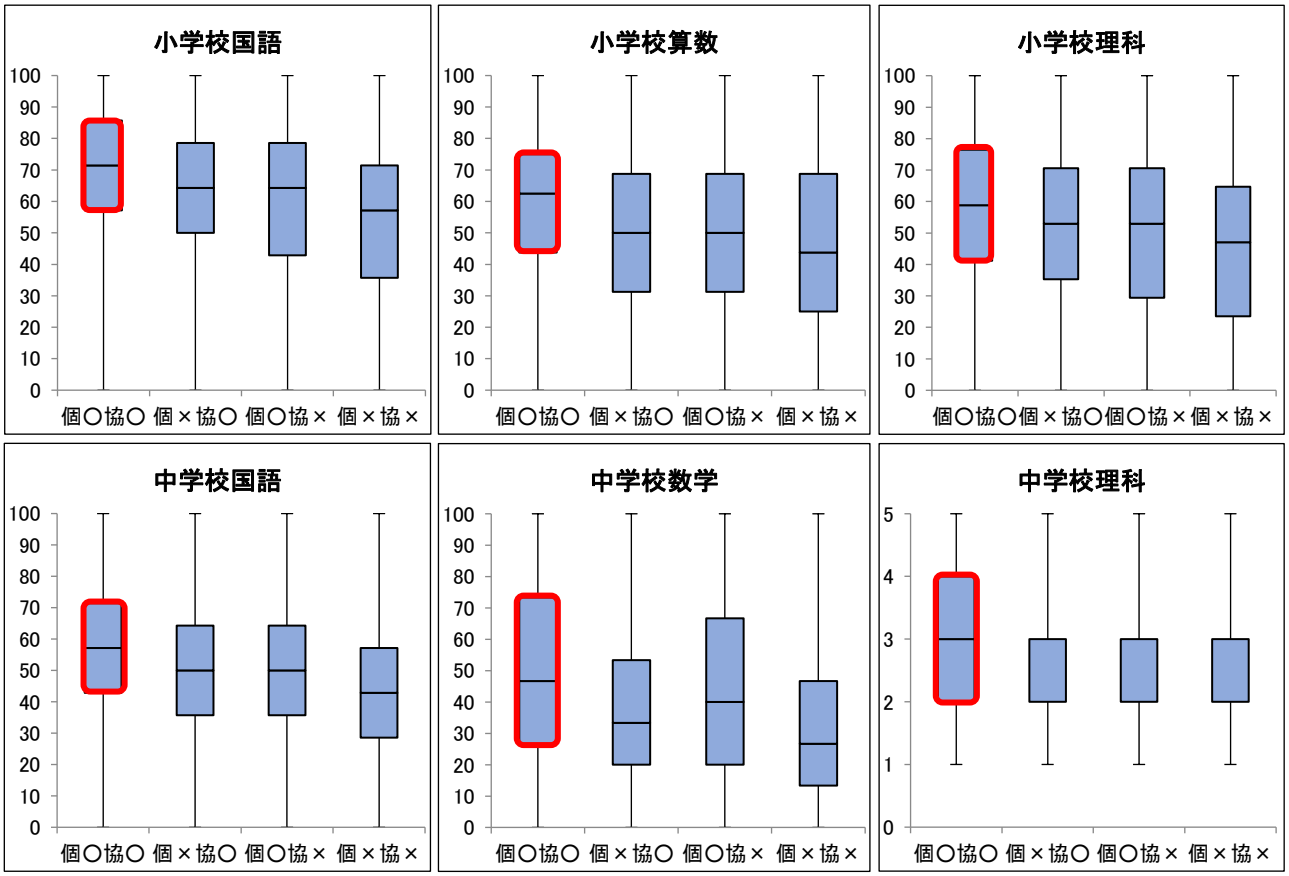
4　「学校に行くのは楽しい」（児童生徒質問）の回答との三重クロス集計

（1）「個別最適な学び（自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていたか）」と「協働的な学び（友達や周りの人の考えを大切にして、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいますか）」と「学校に行くのは楽しい」との三重クロス集計。



「個別最適な学び」と「協働的な学び」の両方に対して肯定的に回答している児童生徒（個○協○）の、「学校に行くのは楽しい」の肯定的な回答の割合は 90%に近い。また、他の回答（個×協○、個○協×、個×協×）よりも肯定的な回答の割合が高い。

（2）「個別最適な学び」と「協働的な学び」と「各教科の正答率」との三重クロス集計（箱ひげ図）



いずれの教科においても、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の両方に肯定的に回答している児童生徒（個○協○）の正答率を表す箱ひげ図の箱が、最も上の位置（正答率が高い位置）にあり、他の回答（個×協○、個○協×、個×協×）よりも、正答率が高い傾向がある。

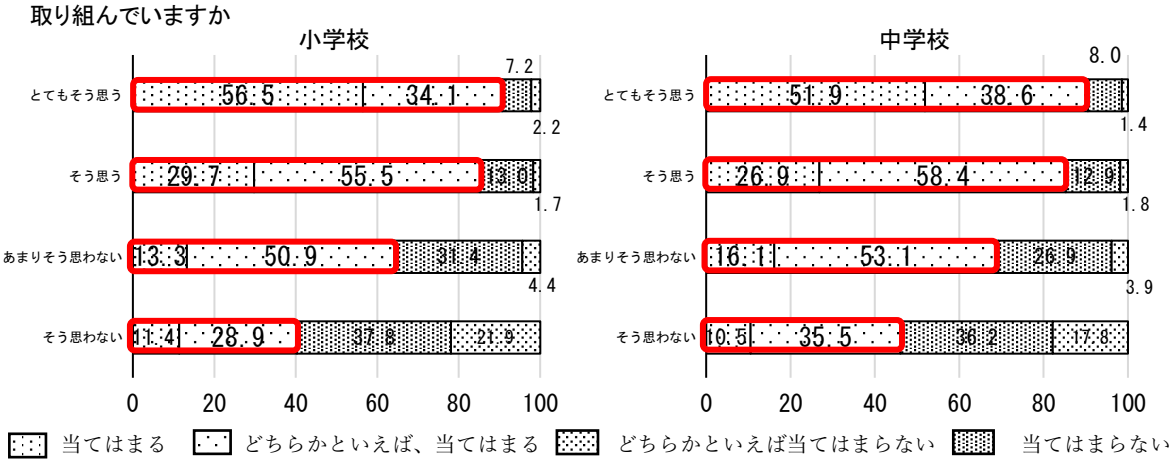
5　探究的な学びに関わる回答状況

クロス集計（児童生徒）

【ＩＣＴ機器を使って情報を整理できる】×【総合的な学習の時間で探究的な学びに取り組んでいた】

あなたは自分がPC・タブレットなどのICT機器を使って情報を整理する（図、表、グラフ、思考ツールなどを使ってまとめる）ことができると思いますか

総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか

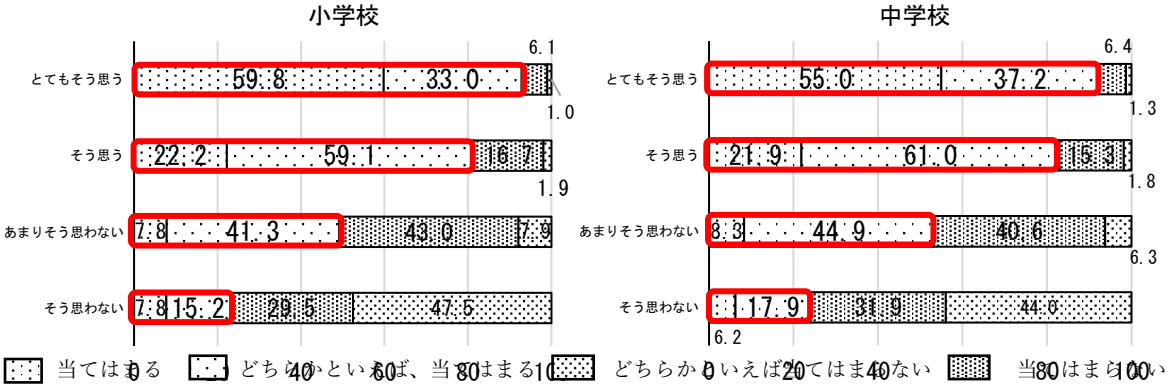


クロス集計（児童生徒）

【課題の解決に向けて自分から取り組んだ】×【総合的な学習の時間で探究的な学びに取り組んでいた】

授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか

総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか

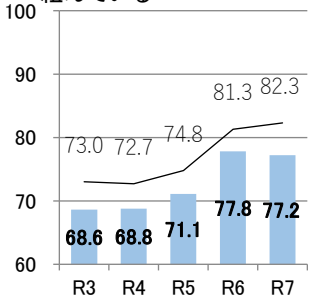


6　児童生徒質問調査の肯定的回答の状況（「探究」に関わる質問等）

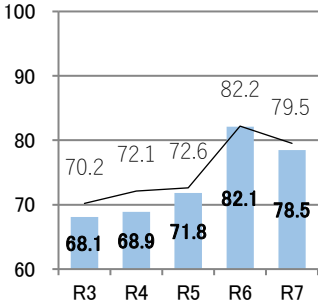
※肯定的回答は、「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」を合わせた回答の割合

長野県　全国

① 総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいる

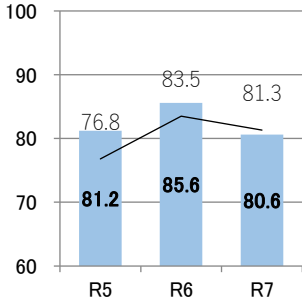


〔小学校〕

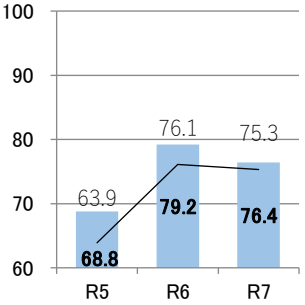


〔中学校〕

② 地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う

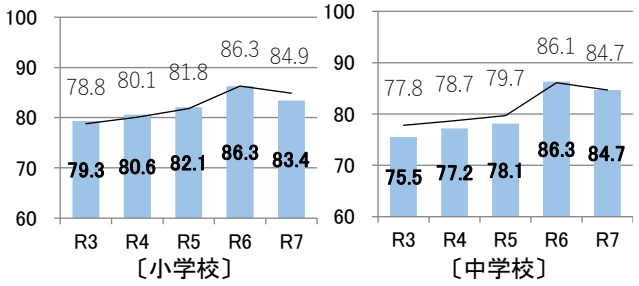


〔小学校〕



〔中学校〕

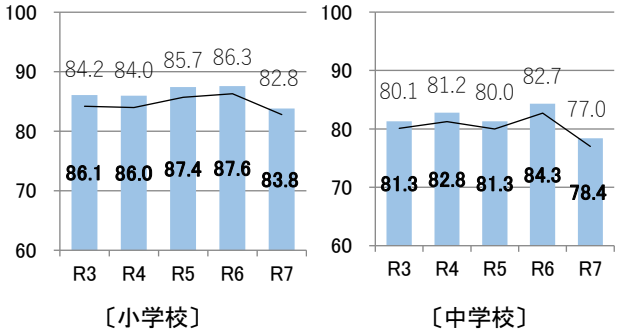
③ 学級の友達（生徒）の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができている。（～R5 広げたりすることができている）



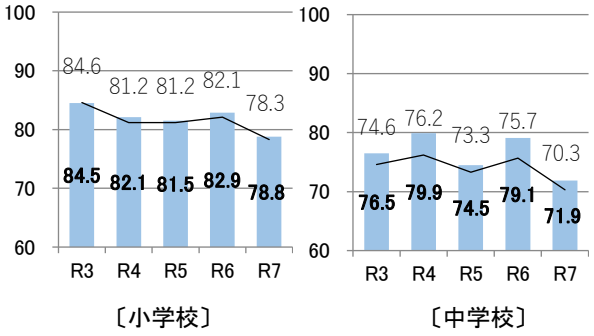
「ＩＣＴ機器を活用する自信がある」「課題の解決に向けて自分から取り組んだ」（主体的・対話的で深い学びに関する回答）と回答している児童生徒ほど、探究的な学びに取り組んだと回答している傾向が見られる。

また、探究的な学びに関する肯定的な回答の割合は緩やかに増加している。

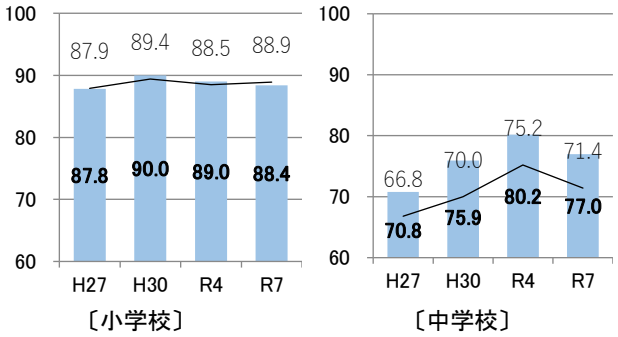
④ 国語の授業の内容はよくわかりますか



⑤ 算数・数学の授業の内容はよくわかりますか



⑥ 理科の授業の内容はよくわかりますか



一方、各教科の「授業の内容がよくわかる」、という小・中学校の児童生徒の肯定的な回答の割合は、令和６年度と比較すると減少してきている。

7　長野県と全国の平均正答数（正答率）・平均 IRT スコアの比較（公立）

〔上段〕：平均正答数／設定問題数　〔下段〕：平均正答率
※中学校理科のみ平均 IRT スコアで表示

校種	年度／教科	令和７年度 長野県	令和７年度 全国	年度／教科	令和６年度 長野県	令和６年度 全国
小学校	国語	9.2／14 問 66%	9.4／14 問 66.8%	国語	9.4／14 問 67%	9.5／14 問 67.7%
	算数	8.9／16 問 56%	9.3／16 問 58.0%	算数	10.0／16 問 62%	10.1／16 問 63.4%
	理科	9.6／17 問 56%	9.7／17 問 57.1%	理科		
中学校	国語	7.7／14 問 55%	7.6／14 問 54.3%	国語	8.7／15 問 58%	8.7／15 問 58.1%
	数学	6.9／15 問 46%	7.2／15 48.3%	数学	8.2／16 問 51%	8.4／16 問 52.5%
	理科	509	503	理科		

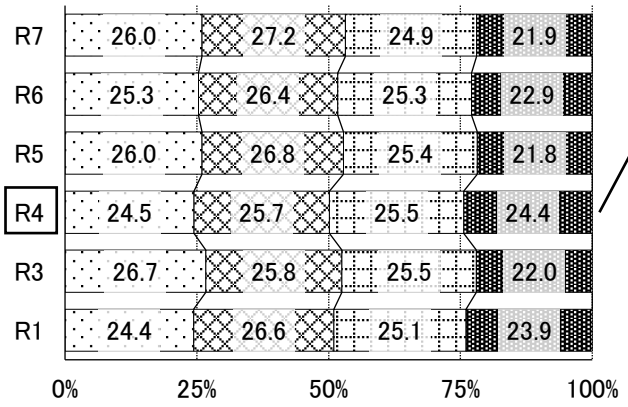
※文部科学省において、平均正答率の微少な差異は実質的な学力面の違いを示すものではないため、都道府県の結果は小数点以下を四捨五入した整数値としている。
※IRT スコアとは、IRT に基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500 を基準にした得点で表すもの。

８　分布に着目した経年の状況

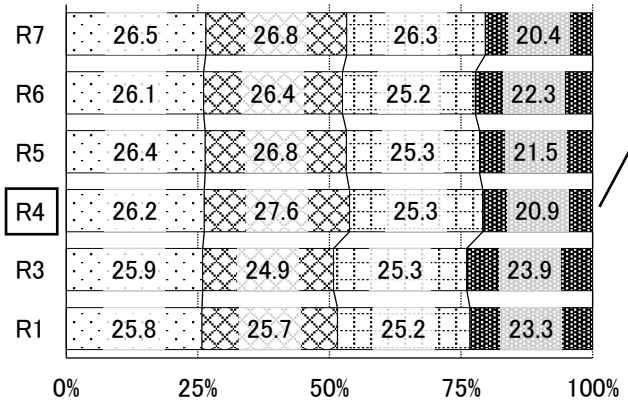
全国の受検者を正答数の多い順に並べ、上位から 25%ずつ４分割(境界を含む階級の度数を按分することで、４等分となるよう補正)し、それぞれの区分をⅠ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳとした上で、各区分に入る長野県の児童生徒の割合を求めたもの。

小学校

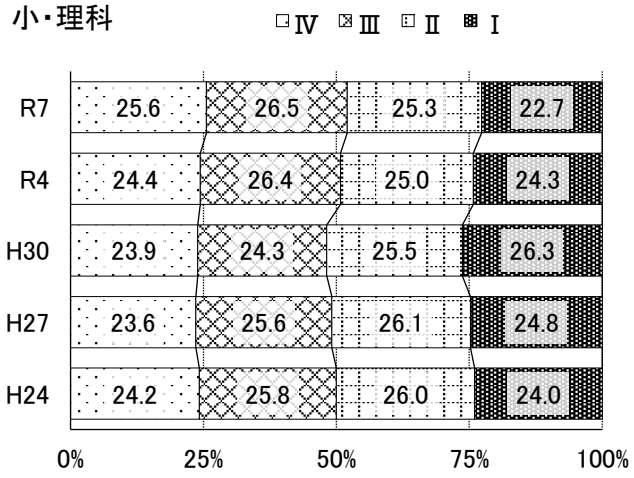
小・国語



小・算数

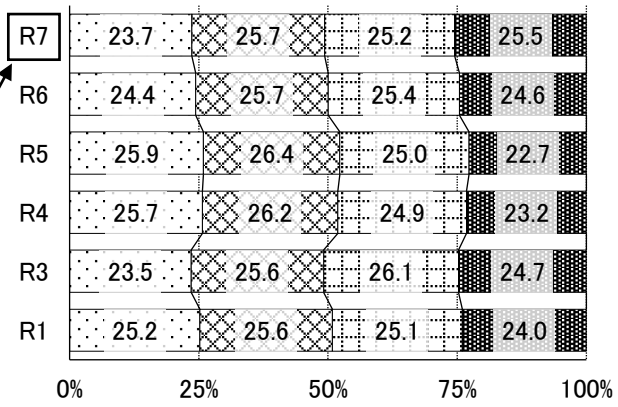


小・理科

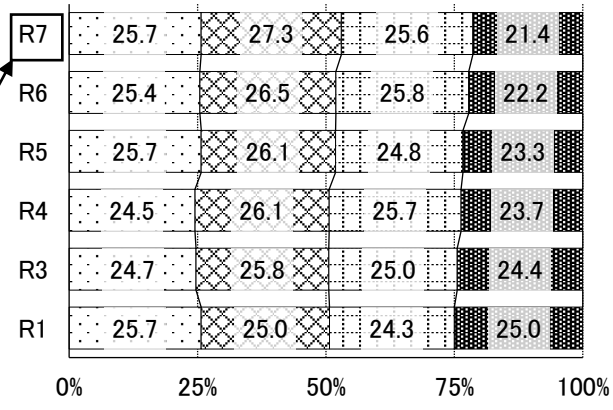


中学校

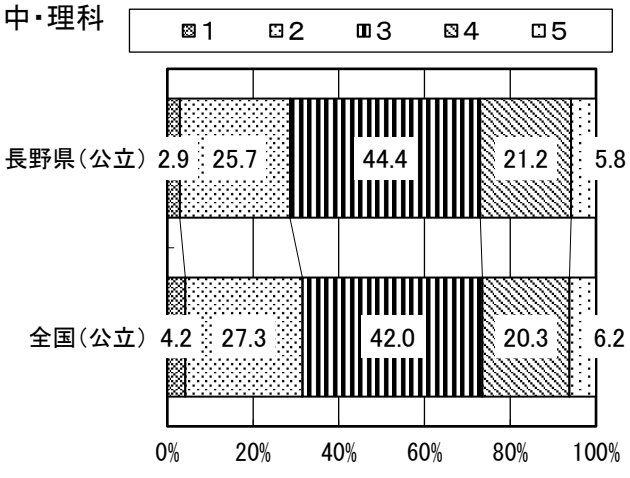
中・国語



中・数学



中・理科



※表中の矢印は、同一の児童生徒集団であることを示している。

９　今回の結果を踏まえた重点的な取組

○県が目指す「一人の子供も取り残されない『多様性を包み込む』学び」を進めるうえで、学校が子どもにとって「楽しい」「行きたくなる」場所であることが重要です。全国学力・学習状況調査の結果を、各学校が子どもの目線に立って学校の仕組みを見直す契機となるよう提供し、子どもにとって魅力ある学校づくりを支援します。

○教科の平均正答率等と児童生徒質問調査の結果を多面的に分析し、学校づくりの参考となる資料を作成し、市町村（学校組合）教育委員会や各学校が取り組む学校改革に対しての効果的な支援につなげます。

○不登校の子どもたちが増加している実態と、児童生徒質問調査に回答している子どもの実態を分析し、県の目指す楽しい学校づくりに、実際の子どもの声として活用します。

○調査結果は、子どものよさや可能性を伸ばす材料として活用できるように、各学校へ伝えていきます。